

大学図書館問題研究会 京都

京都市左京区吉田本町 京都大学教育学部図書室 (竹村心気付)

TEL 075-751-2111 (内3013)

研究会についての私見

— 京都工芸繊維大学からの報告 —

尾崎 俊 弥

京都工芸繊維大学の大同研会員は5名、全員附属図書館の職員です。工繊大には附属図書館の他に化学棟図書室があり職員が1名いますが、夜間大学の学生であることが多く、私たちと共に時間を持つことには無理があるようです。

現在、この会員5名によるグループ活動はありませんが、地道な個人的研究を続けている会員もいます。

以前、図書館の機械化が本格化しようとしていた頃、グループ活動として定期的な会を持っていたことがありました。他大学からも数名の参加者を加えて、月1回の勉強会という形で進め、参加者が順に研究発表する他に、京都大学の図書館や大型計算機センターの職員の方に講師をお願いしたこともありました。勉強会のテーマは図書館の機械で、先進国・先進館の機械化の現状、各種MARCについて、データベースの基礎知識、文部省などから発表される機械化の政策などを取り上げました。目前に迫った機械化というものが、どうやら避けて通れないものであること、またそれが今までの仕事上の経験からだけでは対処しきれないのではないかという意識が参加者にあったと思います。機械化のための人間

的な下地作りという意味から、勉強会は一応の成果を修め終了しました。以後、散発的に工繊大の会員のみで、自館内の問題について各人の係を離れて一つの意見を形作っていきたいと考え、会を持ちました。

工繊大での活動の報告は以上ですが、少ない経験からですが、私の思ったことを並べてみたいと思います。

一つは、工繊大のように小人数のサークルでのグループ研究のテーマ選択の難しさです。私たちは以前に図書館の機械化というテーマを選びましたが、これは図書館の全組織にかかわる問題で、参加者全員が現在の自分の仕事に直接かかわってくる問題として受け止めることができました。しかし、そうでない問題、例えば整理技術の問題や参考調査に関することなどは、配置換えによる仕事のローテーションを承知してはいるものの、色々な係の人が集まって掘り下げた研究のテーマとすることは難しいと思います。もっとも、現在の仕事はどうであれ、自分の興味のある研究テーマを持つ人や、講演を聞いて色々な研究分野をのぞいてみたいという人は別ですが。

失礼な言い方ですが、私には、研究という行為が仕事というよりはむしろその人の生活

の一部になっている人と、仕事にできてきたおできのような研究を持つ人の2種類いるのではないかと思ったりします。大小にかかわらず論文を発表したり講演を行ったりするには相当な労力と時間を要するはずですし、長期間に渡る研究も前者の人たちによって行われているのではと思います。それに対して後者は、仕事上何らかの壁に突き当たって、一定レベルでうろろうしており、その解決のために研究なるものを開始する人。

自主的な活動における研究は、広い視野で自分の愛すべき題材について行いたいというのが、私にはイメージとしてある訳ですが、現実には研究というものが生活の一部になってくれません。学生時代に勉強がそうになってくれなかったのと同じです。それで私にとって研究というものは、必要に迫られて、すぐに仕事に反映できる、そういうものであってもよいと考えることにしました。自主的活動というものの負担をできるだけ少なくし、完全に自分から抜け落ちてしまわないようにするためです。

それは何もしないことへの抜け道作りで、各人バラバラでまとまったことが何一つでき

ないではないかとおこられそうですが、自主活動がなかなか身につかない者にとっては、これでもよいと思います。そうする中で、他の人の研究活動をのぞいてみたり、同じテーマを持つ人が見つかるのはよいことです。メンバーの少ないことは、共通の会を持つ上では有利なことも多いのですが、全員が納得する共通のテーマが見つからない時は、このようにバラバラでもかまわないと思うのです。

もう一つは、係間の連絡の場としてのあり方です。機械化をテーマとしていた頃も、会の前後には自分の係における仕事の話が出ます。それは愚痴であったりもする訳ですが、総勢14名の図書館とはいえ、他系の現状には知らないことが多くありました。その中には図書館全体の問題として、メンバー全員で考えていかなければならない問題もありますが、いつも出てくる問題を自分のこととして考え、何らかの答えを出そうとするのは疲れることです。まずは情報交換の場として確保できればと思うのです。

勝手なことばかり書きました。終り。

(京都工芸繊維大学)

嵯峨野で図書館を語り野鳥を観る

越 野 正 勝

4月23日、24日の両日にわたって京都・嵯峨野で開かれた大図研の大学図書館政策・20周年記念事業討論集会は、たいへん有意義なものであった。

はじめのうちは少し低調ではないかと思われるくらいの雰囲気であったが、次第に盛り上がってきた。

「いま、大学図書館員は生きているといえるだろうか。」という発言があり、大いに考えさせられた。仕事がどんどん増えるにもかかわらず、人員が減らされ続ける職場。明るさが失われ、重苦しさが募る職場。忙しさが増し、疲れが蓄積し、充実感のない日々が続いている図書館員が多くなっているのだろう

か。

この討論集会は大学図書館の総合的發展をめざして「日常業務の改善の課題」を中心に大学図書館政策委員会がまとめた第1次中間報告(「大学の図書館」No.174参照)をもとに議論が展開され、また20周年記念事業の企画についても検討された。

はじめに酒井委員長は、「現場の状況から洗いざらい問題を出し合い、暗中模索しながらまとめてきた。」と経過を話された。

ついで利用者の資料要求、貸出、学生に対する図書館員の役割、若手研究者へのサービス、障害者サービス、大学図書館の公開、配転問題、専門性等について政策委員会の討議

内容が紹介された。

どれも現場で日常的に遭遇している問題ばかりで、とくに「貸出をのぼすこと」「職員問題」「研修・養成」に議論が集中した。

こんども大学図書館政策づくりの議論が継続されるのであるが、今回のようむ全国的な討論と併せて、各地で討論をまきおこすことが求められているのだ、と痛感した。

2日目の早朝に企画された大沢池と広沢池周辺をめぐる探鳥会は、立命館大学の若井勉氏の名ガイドで16名が参加した。約2時間の行程で、鳴き声のみのものを含めて24種類の

鳥が確認できた。参考のために名前をあげてみよう。ユリカモメ、カワラヒワ、キジバト、シジュウカラ、イカル、ツグミ、モズ、アマサギ、カイツブリ、バン、キジ、セグロセキレイ、ムクドリ、スズメ、カラス、ツバメ、ドバト、カルガモ、ホオジロ、ヒヨドリ、ホトトギス、ウグイス、サンコウチョウ、カワセミ（ホトトギス以下は声のみのものである）

このように今回の集会はとても充実した内容で、印象に残るものであった。

（石川支部・金沢大学附属図書館）

大図研ゼミ「職員論」に参加して

貴女は大図研ゼミの「職員論」について勉強したらどうですか？（スベキです!）と世話人の竹村さんから熱い熱いお誘いを受けて「やっぱりやらねばならない」と奮起して入りました。「職員論」といっても今まで自分の中にある問題意識とどう結びつけて進めていったらいいかな、とまだとまどいながらついていっています。

「職員論ゼミ」に関連して、先日、日本の大学図書館員養成の現状の一端を知る意味で、筑波の図書館情報大学を、また、工業技術院関係の専門図書館（員）として精力的に図書館づくりをしてこられたいくつかの図書館を

見学してきました。見学した両者を結び合わせてみて、日本の大学図書館員養成の現状と今後の課題に様々な思いがめぐりました。

こんな研修をつんでこんな図書館づくりをしていきたいとたくさんの想いはつのも一人職場の自館にひきよせてみると、現実はまだならず、いつも極度に落ちこんでしまいますが、ゼミに参加して、仲間にとたくさんの刺激を受けながらがんばりたいと思っています。

（京都大学・理学部
地質学鉱物学教室
那須 たみ子）

NCR 1987年版セミナーに参加して

現在の私の仕事は洋書目録担当で、NCR 1987年版がいよいよ出た、と聞いても、特に開けることもなく過ぎて来たが、このセミナーに向けての読み合わせ会に参加するのを機に、久しぶりにNCRにふれることができた。そしてこのセミナーでは、目録の歴史から始まって今回の'87年版に及ぶ話、機械入力のこと、書誌階層に関する話、それに目録情報の不備を補うための主題書誌作成の方策などを印象深く聞いた。しかし振り返って自分をとりまく日常を見れば、特殊文庫

の整理に追われたあと、膨大な未整理図書をかかえながら、一部学情センターへの入力開始、それに伴う仕事手順の変更、目録記入の変更、参照カードの作成、加えて機械による出力カードの手直しなどなど、あっという間に過ぎて行く。それはいさかかしんどい話だったというのが正直な感想なのだが、日常業務に追われるだけの日々から抜けて、自分の仕事を見つめ直し展望を得るための何よりの2日間だった。

（京都大学文学部・橋本 展世）

・NCR '87年版が出版されて以来、その概要を知りたいと思っていた矢先きのことでほんとうに良い機会であった。書誌データをつくる私としては当然目を通していなければならない筈であるが、そこは思うにまかせない現状である。

'87年版に先だち、本版三次案が出て、部分的に目を通したにすぎない段階で、書誌階層という新しい用語に一瞬とまどった。が、従来からの本書名、叢書注記、内容注記と考えると気持ちがおちついた。ところで、'87年版の考え方として、目録の機械化、標準化にともない、書誌情報の共有化、機械検索という大きな流れのなかで、それらに対応すべく、書誌レベルを明確にする必要性が生じてきたことがあげられる。図書館における目録の対象が多種多様な資料に広がり（例：静止画像、三次元工芸品・実物、非刊行物など）それら

にも適用できること。新版予備版がほとんど生かされていること。さらにISBDの区切り記号の導入などであろうか。標目部分の団体の考え方も“団体の内部組織はその内部組織を省略した名称を標目とする”と決められている。が、別法、任意規定が随所にあるため、それぞれ自館に適合するように利用できるのではないかと考えられる。

主題検索については、大学図書館に限らず件名目録が有る方が望ましいし、分類目録・件名目録は車の両輪といえよう。しかし、学問分野での学際的研究が広がり、その一方で一分野のなかでの細分化が進み、主題のしぼりこみも非常にむつかしい。そうであれば、書誌データベースのなかから自由に自然語でワード検索ができる方が良いのではないかと考えられるがどうであろうか。

（同志社大学・沢田 美智子）

図書館員のための情報検索講義 第2回

なぜ、抄録誌や索引誌について知らなければならないか。それは、例えば、オンライン検索の場合、確かに、自由語で検索してもある程度の検索件数をえることができるが、キーワードに使用されていることばを知らなければ、相当な数の検索漏れが生じるからである。

⁽¹⁾これは、冊子体の抄録誌や索引誌利用の場合も同じである。検索の際、索引を使う。その際、索引見出し語に用いられていることば、その規則を知らないと、検索漏れが生じる。

⁽²⁾また、抄録誌や索引誌では、各々独自に略語や記号を使っている場合がある。略語や記号を知らなためにより不十分な読み方しかできなかった、ということでは残念である。また、オンライン検索の場合、略語を知らなためにより、またもや検索漏れが生じる。

そこで、次のことにつねに注意されたい。

○見出し語にどんなことばが使われているか。
○シソーラスはあるのか。使い方はどうなっているか。

○略語や記号にどんなものが用いられているか。そのリストや規制はあるのか。

前置きが長くなった。では以下、前回につづき、CAについての説明を続ける。

第1章 Chemical Abstracts

第1節 Issue（つづき）

③ CAの略語

第108巻第1号を見ていただく。

IntroductionのXVIIに「Abbreviation and Symbols Used in CAS Publications」が載っている。CASの出版物で使用される略語のリストである。もちろん、CAにおいてもこの略語が用いられている。

CAの略語が問題になるのは、特にオンライン検索の場合である。

丸善MASISセンター検索・研修課は、略語の使用を忘れると相当数の該当文献⁽³⁾を落とすこと、DIALOGのCA Searchレコードでは、アイデンティファイア項目(CAのKeyword Indexに相当)、およびデスクリプタ項目(CAのGeneral Subject IndexおよびChemical Substance Indexに相当)のテキスト修飾句(text modification)に略語があらわれること、CA Searchには抄録がないので、略語の重要性を高めることを、⁽⁴⁾述べている。

なかなか先に進まないが、紙面の都合で以下、次号へ。

注

(1) 例えば、DIALOGのMEDLINEで看護婦についての文献検索をするため、S Nurseとするとかなりの検索漏れが生じる。なぜなら、統制語としてNursesが用いられているためである。そこで、シソーラスMeSHで事前に統制語として何が用いられているかをチェックする必要がある。

(2) CAで、Gas Chromatographyに関

する文献を調査するため、このことばでGeneral Subject Indexを引いたとしよう。出てこないのである。General Subject Indexでは、Chromatography 関連の見出し語を一箇所に集めるため、倒置型の見出し語を採用している。すなわち、Chromatography, Gasのごとし。このような見出し語のチェックのために、CAではIndex Guideがある。

(3) MASISセンター検索・研修課「検索ワンポイントアドバイス CA Searchでの略語と記号」MASIS NEWS 1982 p.32~33, ほか MASISセンターDIALOG研修会テキスト「化学—基礎」1986 p.136~140, や紀伊国屋書店国際情報部「DIALOG CASERCH日本語版」1984 p.311-26~311-27 参照。

本講義指示のテキストでは、化情協CA, p.138にわずかに説明があるだけである。

(4) 化情協のCAS ONLINE や STN International のCAファイルは抄録つきである。なお、筆者がCAの抄録をみた限りでは、抄録部分にも略語は使われている。

(京都大学薬学部・菅 修一)



(さしえ・INDEX CHEMICUS 誌より)

— 編集後記 —

バタバタと日常業務におわれておられる図書館員のみなさん。お元気ですか。大図研では、このところ4月、5月、6月と土曜、日曜にかけて、研究集会が続いております。いつも、しんどいなーと思いつつ参加しますが、不思議と元気がでて、やる気になります。本当に日常業務に流されてはいけないですね。

最近、週休の閉庁方式も考えられ、年休も夏季以外に大いにとりなさいという文書もまわっています。年休を大いにとって勉強しましょう。小論文、レポート、職場の報告、感想文、愚痴、何でもけっこうです。原稿を送ってください。(T・H)

大図研・出版部 出版物案内

- ◆「大学の図書館」(大図研会報) 年間予約購読料 送料共 4,000円
- ◆大学図書館の機械化・電算化、学術情報システム 文献リスト-1987年8月
かみかた機械化研究グループ 500円
- *◆討議資料 学術情報システムと大学図書館 (日本教職員組合大学部) 500円
- ◆大図研論文集 14号 好評刊行中 12月15日刊行..... 1300円
 - 教室内生産情報のデータベース化をめざして-索引作成の例-(城山秀子)
 - 昭和19年3月不良図書のとさき(広庭基介) 他

◆◆品切れのお知らせ◆◆

- ◆大図研論文集 No.1, 2, 4, 5 / 6, 9 ◆大図研シリーズNo.1, 6
- 以上については、品切れとなっています。悪しからずご了承下さい。

◆大図研論文集◆ *印は残部僅少です

- No.3. わたしの 図書館論 覚書 他 600円
- *7. 大図研結成10周年記念講演会(1980.5)記録 1,000円
- 8. 図書館員の将来像(講演記録) 他 1,000円
- 10. 書誌学の方法論、大学図書館員のための西洋書誌学事始め(講演記録) 1,300円
- 11. 和漢古書とその鑑別(講演記録)、参考図書に関する評価基準 他 1,000円
- 12. 大学教育と大学図書館-「学部」「講座制」などにもふれながら 1,200円
- 13. 同志社大学における教育実践-教員面接調査の報告-他 800円

◆大図研シリーズ◆ *印は残部僅少です

- *No.2. 理想の図書館像を求めて-中規模大学図書館調査報告- 800円
- *3. 図書館学の課題(森耕一著) 350円
- *4. 図書館における職員人事の実態について 600円
- 5. 大学図書館の発展方向を問う-学術審議会答申とその後- 1,000円
- 7. 大学図書館の総合的発展をめざすために、
今、大学図書館員は何をなすべきか 1,300円
- 8. 大学図書館の日常業務改善の課題-第9回全国研究集会報告集- 1,200円
- 9. 「学術情報システム」その現状と課題 800円
- 10. 『文部省学術情報システムへの評価と提言』-1986年8月版- 800円

◎日本図書館協会に出版物の販売を委託します。あわせてご利用下さい。

ご注文は支部又は出版部まで

〒 543 大阪市天王寺区南河堀町4-88 大阪教育大学附属図書館 寒川 登 気付
 銀行振込：三和銀行寺田町支店 普通預金口座 31018 大図研出版部 寒川 登宛
 郵便振替：大阪1-309061 名称：大図研出版部

大図研・出版部 (06) 771-8131 内線 335